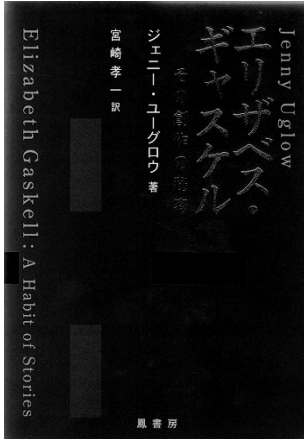


ジェニー・ユーグロウ (著) 宮崎孝一 (訳)
『エリザベス・ギヤスケル——その創作の秘密』
東京：鳳書房、2007、8,000 円、xi+866 頁。

長瀬久子



原書である Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: faber and faber, pp. xiii +690, 1993) は、言うまでもなくギヤスケル研究の最も基本的な文献のひとつで、伝記と作品の批評からなる本格的な評伝である。

批評部分では、主要な小説は、執筆の経緯なども含めると、それぞれが翻訳で 30 頁におよぶていねいな解説批評がされている。細部まで読み込み、作品にそう手堅い論法が一貫している。主要作品だけでなく、中・短篇小説からノンフィクション

まで、簡単な言及であってもほぼ全作品を取り込んで彼女の創作活動の軌跡を跡づけている。

しかし本書を他の評伝と決定的に差別化するものは伝記部分である。自分独自のギヤスケル像を構築するにあたり、ユーグロウは他の研究者が価値を見出さなかったようなギヤスケルのライティング——習作のような短篇や育児日記、ゴシップ満載の手紙類など——を重視した。特に、気のおけない友人たちとおしゃべりを交わすギヤスケルの、文体がルースなうえに、たえず話題が飛び回るやっかいな書簡を渉猟し、一見瑣末な女のおしゃべりの行間まで読みこむことで、デイヴィッド・セシルのいう、鳩のようにおだやかな女らしい「ギヤスケル夫人」像をくつがえす人間像の構築に成功している。ユーグロウの提示するギヤスケルは、精力的で、行動範囲が広く、社交に熱狂する。衝動的で、神経質で、早口で、おしゃべりだ。真剣に『メアリ・バートン』を書きながら、「飢餓の 40 年代」のランカシャーを離れば、罪悪感なしにぜいたくな大陸旅行を楽しむ。しじゅう

病気だが、外出したいときには何者もそれをやめさせることはできない。家族を愛し、花や野菜を育て、牛を飼ってバター作りまで計画する家庭的な主婦でありながら、仕事に没頭する夫や娘たちを残してひんぱんに、ときには何ヶ月も家を空ける「独り者のジプシー」でもある。いくつもの人生を同時に生きるこの矛盾に満ちた複雑な女性の、けたたましいばかりに多彩で多忙な人生が、彼女自身や友人や同時代の作家たちの書簡を豊富に引用しつつ提示されると、読者はほとんど眩暈がするほどだ。そんなギヤスケルをユーグロウは愛情をこめて描いており、彼女自身の文章もギヤスケルの文章に劣らず活気があり、ユーモアがこもっている。本書が出版された1990年代という時代は女性の伝記にとっては幸福な時代だったといえる。本書よりわずか17年以前に書かれたウィニフレッド・ジェランの評伝では、ジェラン自身はユーグロウに劣らずギヤスケルの書簡を読み込んでいたらしく感じられるが、彼女の「ギヤスケル夫人」のイメージははるかに抑制的で、著者のコメントも慎重であった。ユーグロウ自身はけっしてラディカルなフェミニストではなさそうだが、やはり本書は女性を性的な規範から解放し、女性の自我や欲望を肯定したフェミニズムを経験した時代の伝記と言える。ユーグロウは、全然おだやかでもハトのようでもない、我が強くわがままでさえある、「夫人」のつかない「エリザベス・ギヤスケル」像を、それが読者に歓迎されることに自信をもって描いている。

こまごまとした家事や社交や旅行やゴシップであふれんばかりのギヤスケルの日常生活をユーグロウが克明に追うのも、「彼女の作品の豊かさは、彼女の執筆時間を妨害した日常生活の充実そのものから来ている（419、以下カッコ内の数字は訳書の見数を示す）」ことを知っているからである。ギヤスケルの創作と日常生活は不可分なのだ。

ユーグロウはギヤスケルの生涯を、表現の意欲を内に秘めた少女が主婦として家庭に入り、「書きたいというわがままな衝動（337）」に躊躇しつつあえて身をまかせ、小説を書き、作家と女性という二重の生活を生きる過程として描いている。各章のタイトル、「本と世界」、「声を見つけて」、「ことの始まり」、「影を抜けて」、「出版に向けて」、「名声と新しい友人」、「重なる円」・・・などが彼女の成長段階を示している。ただし、10章のタイトル“Exposure: *Mary Barton*”が翻訳で「暴露」となっているのはどうだろうか？ 社会に存在を知られていなかった一主婦が

『メアリ・バートン』を出版することで、「影を抜けて」「姿を現した」のだと思うが・・・

彼女の創作活動と日常生活を連結する最強の環は、原書の副題ともなった“A Habit of Stories”、彼女の「物語の習性」である。ギヤスケルは「物語には合理的な説明以上の説得力があることをわきまえて(273)」おり、作品には「説明」よりも多くのエピソードを盛り込み、エピソードに語らせる小説家だが、彼女の物語の習性は小説の執筆に発揮されただけではなかった。物語することは第二の天性であり、彼女は「社交の場でのお話をアートと見なし(322)」た。彼女のアートは、おもしろいゴシップを異常な執念で追い求め(328-29)、色づけして友人にばら撒く日常的な習性から始まっていたのである。ユーグロウは、彼女の物語する習性を伝記全体を通じて追っているが、ときとしては、ディケンズ家の金のディナーセットという裏づけない噂を横流して彼にひやかされたり、ジョージ・エリオットがメリアン・エヴァンズではないという噂に固執して恥をかいったりという、「経験に学ば」ないギヤスケルの無思慮や暴走癖も見逃していない。

本書はギヤスケルの(および彼女宛の／についての)書簡を主要な資料として書かれているため、書簡がほとんど現存しない結婚までの時期は冒頭の三章で簡単にまとめられ、通常は伝記の興味深い部分である性格形成期についての記録や考察は少ない。また彼女が夫のウィリアムに宛てた手紙は現存せず、彼が妻にあてた手紙は一通しか残されていないこともあって、彼女の生涯の伴侶で、妻の創作活動に影響も協力も多大であり、自身も活動的な牧師、福祉家、教育者であったウィリアムの人物像は、本書では妻の鮮明な人物像に隠れている。読者はこの才能豊かな夫婦の、34年に及ぶ生産的な結婚生活の詳細をぜひ知りたいところだが、伝記はそんな希望にじゅうぶんには答えてくれない。それでも、「ギヤスケル夫人」の背景といえ家庭的な幸福だけが指摘されていたのと比較すると、本書は、天職も性格も異なる、歳月とともに相手に不満ももち、すれ違い夫婦になりながらもたがいに忠実だった彼らの、一筋縄では捉えられない夫婦関係をわずかながら垣間見させてくれる。これだけの大部の伝記にしては多少食い足りない気もするこれらの点は、本書が書簡という生の資料に基づいており、その書簡の多くはギヤスケル自身が文通相手に廃棄させた以上やむをえない。以上、ギヤスケル個人の人間像についてのみ述べたが、ヴィクトリア朝についてのユーグロウの豊富な知識と豊かな表現力で解説される、産業革命下のマンチェスターの諸事情

やクリミア戦争など、当時の社会の見取り図も本書の大きな魅力である。

ギヤスケルの研究者必読のこの評伝が翻訳されたことは真に喜ばしい。訳者はいまさら紹介するまでもない、ディケンズを中心とする英国小説研究の大家である。評伝の内容や訳文とは直接関係のないことだが、すでに米寿を越えられた訳者がギヤスケルの研究や翻訳に挑戦されること自体が、人生の後輩たちに勇気を与えてくれる。

翻訳の出版によって、この長大な伝記を通じてユーグロウが提示するギヤスケルの複雑な人間像の全体を、多くの読者が比較的短時間の読書で把握できるようになった。作家の評伝は英文学を学ぶものなら原書で読むべきなのだが、必読のテキスト類に追われる生活のなかで、じつはこれがなかなか難しいことなのである。論文執筆の必要に迫られて、索引を頼りに伝記の一部だけをつまみ食いしている学生や研究者は少なくなかったであろう。

ただ、こうした恩恵を与えてくれる翻訳ではあるが、問題がないわけではない。原書の索引と原注が訳書では削除されたために、訳書は研究書としては使い勝手の悪いものになった。研究目的でなく、伝記読み物として本書を楽しみたい読者のためにも、索引はぜひほしいところだった。800頁中に入れ代わり立ち代り登場する膨大な数のヴィクトリア朝の（有名無名の）人々のこみいった関係を一度読んで記憶するのはとても無理である。

50頁にわたるかなり詳しい原注を排して簡単な訳者注が付されている。一例をあげると、『シャーロット・ブロンテの生涯』についてのマーガレット・オリファントの回想が本文中に引用されている(528-29)。この引用文に付された原注では、オリファントの回想の出典だけでなく、ユーグロウがオリファントの文章をアリソン・カーショウの論文から借りたことを、その論文の出典とともに明記し、さらに『生涯』についてカーショウが別の角度から書いた論文も同注で紹介している。この原注が、「マーガレット・オリファント(1828-97) スコットランドの女性小説家。代表作は『カーリングフィールド年代記』と呼ばれる一群の作品群」という簡単な訳者注に置き換えられている。書評子としては情報量の多い原注の削除を惜しむが、若い学生にとっては訳者注は親切であろう。

最後になったが、本訳書についてやや残念な気がすることは、ギヤスケルの小説や日常生活の細部について、翻訳が時に荒っぽい場合があることである。この

伝記を埋め尽くす、ギャスケルのさまざまな活動やゴシップや、中・短篇小説も含む作品の、すべての細部を正確に翻訳することは、その大部分が19世紀の女の日常生活に関する事柄であるだけに、大正生れの日本男児にとっては難事業であつたらうことは察するに余りあるのではあるが……。原書のサブタイトル“A Habit of Stories”が訳書では「その創作の秘密」という抽象的なサブタイトルに替えられたことも、著者の意図が曖昧になってしまうように思われて、書評子としては多少残念な気がする。とはいえ、御高齢にもかかわらず、フェリシア・ボナパルトの『ひき裂かれた自我——ギャスケルの内なる世界』（鳳書房）の翻訳出版から1年後に、本文だけでも原書で616頁、翻訳にして837頁の本訳書を上梓されたことは瞠目に値する。日本語で読める数少ないギャスケルの研究書に本訳書が加わったことで、若い学生でもギャスケル像に接することが可能になったが、そこからやがて日本のギャスケル研究の裾野が広がり、彼女の文学の愛読者と研究者が増えることを期待したい。

（静岡県立大学准教授）

